

---

# 不易流行

機械仕掛けネコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不易流行

### 【Nコード】

N4563BA

### 【作者名】

機械仕掛けネコ

### 【あらすじ】

野心や功名で争いの絶えない世界が舞台。長きに渡る戦争と続いたが故の貴族腐敗で傾きかけた国。民の為国を立て直そうと若き王は共に苦難を乗り越える救国の英雄たりうる者の召還を決行した・  
・孫の代のお話。唐様で書く三代目とまらないように頑張れ。

## 王道楽土

私は王家に生まれて問題なかったのだろうか？と最近特に思う。

武術に関しては問題ないのだがはたしてそれは王に必要な能力なのか。優秀な家臣を多く抱える徳があるとも思えず、かと言って万民を導ける英知を持ち合わせてもいない。

先代の父上は賢王とまでは行かないまでも決断力に優れる人だった。家臣達の意見を良く聞き、無用な軋轢を避け地道に国を発展させたものだ。

老境に差し掛かった父上に少しでも楽をさせてあげようと若輩の時に王を継ぎ、そして自分の無力を思い知った。日々時間に追われ続け妻とまともに顔を合わす暇も無く、近隣国から訪れる貴族・王族の相手をし腹の探りあい。良くもまあ父上はそんな合間を縫って私の相手をできたものだ。

やはり浅学非才であり徳もない私ではこの程度なの……。

「聞いているのかい？コウ君。僕には夢と言うか成さねば成らぬ事が有る。それは義務と行かないまでも最低限の譲れない事なのだが、そう有るんだよ。賛同させてあげるし理解する機会もあげよう、してくれないと衆人環視の前で有り得そうな誹謗中傷を心苦しくても『やむを得ず』コウ君の友人や家族に刻み込まなければならぬ。愛しいコウ君に対して心を鬼にしなければならぬ。救いようの無いコウ君でさえ！重責を担う僕の現状はとても耐え難いものなのだよ。」

と人の煩悶を建前風味な暴言を聞かされて現実に戻される。

本当にこの人は我が国の丞相なのだろうか？祖父王が請うて国に迎え、限られた人材・予算・資源・軍備を以って国を支えてきた、きただが能力と性格の隔たりが兎に角酷い。

「寧ろ謙り傅け、その程度の保身を勞せる立場にあるのだらうからね。出来なければ腰の飾りな鈍らでセルフ奇術ってナウツ！と首をオープンゲットな所業をしてもつてもかまわない、とても心躍る情kゲフンゲフン貴族や騎士の見栄が特等席で鑑賞できるのだ。こちらに連れて来られて幾星霜、帰る手立ても無く非常に鬱だ人の不幸である蜜で精神的血糖値を上げさせやがってくださいな100歩譲つてさせる。人としては幾ばくかの寤めやら苦言如など程度の知れる小言を貰うくらいだろう、正直行わなければ日常生活に支障を来たす。僕が望むのは『眠くなったら寝たいだけ寝る』と『食べたいときに食べたい物を食べる』や『心行くまで気力体力の続く限り遊ぶ』くらいだよ？。それでもさせないとなれば侘びの方法として古来から伝統の鉄板焼き土下座で誠意を見せてくれてもいいが？」

「丞相・・・丞相が如何に人格が破綻しているかは今更問いせんが。国の王に対してその言葉使いは直すべきだと思えます。折角の幼女な見ためなのでから庭園にでも出て蝶々をどこまでも追いかけて私に平和を享受させてください。」

「なにか言いやがりましたか？腑抜け」

やはり口では勝てないか？

「当然だよコウ君、僕は君が生まれた時から知っているんだ。」

「人の心を読まないでもえませんか丞相。」

「そして口を開けば口答えだ口答え、幼き日の『立派な王様になって姉上を后にしてみせるよ』と言っていた可愛いコウ君は既に死んだのか。墓所も知らねば花も添えられないな。」

勝とうとしたことすら間違だったか。

「この際ですので私からも陛下に進言をよろしいですか？」

流石は朋友劣勢に助けをしてくれるとは、友とは得難いものなのだ。

「近衛を預かる者の意見と致しましては後宮に籠りお励みくださいませ。どうせ有事の際以外には無能で御座いますからな、いつそ政も『よきにはからえ』で済ませて頂ければ万事滞りなく終わりますゆえ。寧ろ面倒な会議は早く終わりにしてください。」

「フォルス貴様もかつ!？」

友は死んだ!!

「なあフォルスそんなに私は頼りないのか？確かに政務に関しては至らない所もあるだろう、一朝一夕で良くなるとも自惚れてはいない。日々研鑽を詰み国の為に在ろうとしている。あと何時も通りに話してくれ寂しくなる……。」

「フォル坊気をつけたほうが良いよ、あれは掘ろうと狙っている。」

「ちょおま俺には愛する妻が居るんだ、来るなら首飛ばすぞ!!」

「君の妻は妄想の産物だ！いい加減に現実を見つめてくれ。あと姉上、武官や文官に誤解されるような事を言わないでください!!」

「ああやっど何時も通りに呼んでくれたねコウ君、これで少しはやる気がでてきたよ。さあ文官武官の子達はそれぞれの部署や地域で上がった問題点とその解決法を述べてくれ。見所があれば試させるし予算も組もう、駄目なら課題を大量に積んであげるから仕事の合間に片付けるように。」

王で在ろうとする私の気概をへし折らないと議会を開催しない姉上、これは認めてもらっていないのか、はたまた畏まった状態では皆から良い案が出ないのか……。

「そのどねもだよコウ君。」

・・・精進あるのみか。

王道楽土（後書き）

初投稿なのでのんびりまいります

## 汗馬之勞

近衛の団長になったのは失敗だったんじゃないかと思う。

俺の生まれたブウクリイエ家は武門の家だ、曾爺さんの代は政治に頓着しない気風の関係で閑職に追いやられたが爺さんの代では姐御の憂さ晴らしで舐めた貴族共が物理的に軒並み首飛ばされて復帰した。

まああれだ、俺の家系は剣振るって敵を切り槍振るって敵を刺し盾振るって敵を殴る、それが特技でありそれしかできない、魔法？んなもん身体強化できりゃあ十分だ。つっても1部例外はいつけどよ。なのにだ、事もあろうに姐御は爺さんの代から近衛の団長を俺ん所の家系から選びやがる。一族揃って最前線の先頭を突っ走るのが好きなのにだ、それを城に籠って観光よろしくうろつくなんざやっつられん。

「フォル坊、近衛が気に入らないなら元帥でもやってみるか？僕が軍事政治と両方やるのは辛いからね。」

「冗談じゃねえぞ姐御。ただでさえ前線から遠ざかってるってのにこれ以上離れてたまるかっての。」

「祖王から賜った家名が泣きますよ兄様！！」

来たよ来たよ例外が。

「私達はトランキリテを護る家系なのですよ。それを戦いたいが為に投げ打つ人がどこにいますか！！」

「内敵なんざ姐御やアルブル爺がどうとでもしてくれるだろ、つてかなこの国で首都ほど敵にとって近寄りたくねえところなんざねえよ。城勤めしてたら腕が錆びるだろうが！！」

「まったくこの堅物は道理がわかっちゃいねえ、兵士なんてもんは最前線で体張って敵食い止めるんが仕事だろうに。姐御やアルブル爺が内政やってっからしみつたれた賊しか出ねえし張り合いつてもんがな。とりあえずスクワットいっとくか。やっぱ兵士は手前えの全力で敵にぶち当たってそれを打ち破らにやあなんねえ……。」

「何筋トレしているんですか！良いですか兄様聞いてください、騎士たるもの「そんなもんは知らん」殴りますよ？」

「騎士なんざ見栄っ張りの意地っ張りばかりじゃねえか、戦場でコソコソ後ろに隠れているような役立たずになつた覚えはねえんだよ。」

「近衛騎士団の団長ともあるう者が何たる言い草ですか！そもそも騎士「五月蠅えよ行き遅れ」死ぬべきですね。」

「くくつ……。あはははははははは いやいや何時もながらに仲の良い兄妹だね。ルウちゃんいつそのことフォル坊と結婚でもして優秀な子を産んではどうかかな？」

「閣下、冗談でもそのような事はおっしゃらないでいただきたいのですが……。」

「こつちだつて冗談じゃねえよ、俺の好みはこんな跳ねつ返りじゃなくお淑やかな女なんだ。第一兄妹に結婚勧めるなんざ何考えてんだよ姐御は。」

相変わらず姐御は掴み所がねえな。

あー……。どつかの神様が俺の境遇を哀れんでお淑やかな子を空から降らしてくれねえかなあ。

「兎も角、フォル坊は近衛を辞めたければ自分以上の適任者を探し出すか育てるかしないとね。武勇に関してはブウクリエ家が抜きん出ているのが現状だし、他家にも居るには居るが上に立てるほど心構えが出来ていないんだよ。」

「だったらフルールを団長にしてくれや。こいつだったらガツチリ城を護ってくれるだろうよ、なんとって不落の処女だ」「死ぬ下郎！！」危えな城内で抜く馬鹿がどこにいやがる！！」

こんなだから嫁に行き遅れるつてのに。未だにコウと結婚を夢見てんのか？だとしたら一生無理だな、あいつ嫁にぞつこんだし。王家で恋愛結婚までやり遂げてんだぞいい加減諦めろつての。

「そこがルウちゃんの可愛い所だと思っけどね。」

「心読むの止めてくれ姐御よ・・・っーか可愛いと思ってるんなら少しくらい手え貸してやれつての。」

「くふふっ悩める乙女を眺めるのが楽しいんじゃないか。」

良い性格してやがんぜ本当によ。

「あつたま来た！兄様そこに直りなさい、斬つて首皮1枚残して殺して堀の魚の餌にしてくださいっ！！」

「泳ぎは上手くなつたかい？フォル坊」

「放り込まれること前提かよ！？つと。」

フルールも性格的に例外とはいえブウクリイエの家系だ、近衛の部隊長と遜色ねえかそれ以上の腕だわ。やっぱこいつが団長やりやあ良いんだよなあ。態と負けて姐御説得すつか？あー・・・姐御の目笑つてねえわ死ぬより酷い目に遭わされそうだ。

「仕方ねえな・・・つと」

「きやつ？」

「ほい、これで997勝目だな。そろそろ4桁いっちまうぞ？」

「合いも変わらずルウちゃんは頭に血が上りやすいね。勝者のフォル坊にはご褒美で北部の龍退治を頼むとするよ、つで負けたルウち

「やんは魔導院で3日間断食瞑想をやってくるように。」  
「いよつしゃー！！龍だ龍、喰い応え最高じゃねえかつ！！そつこ  
ー行ってくる。」

かーっ堪んねえな久々に龍を遣り合えるぜ畜生め。あいつら妙に頭  
良いからトランキリテに近寄りやしねえし、害意持った飛龍系だと  
国土入った瞬間姐御が砲撃魔法で撃墜しちまうからな。今日は跳ね  
っ返りの相手についてねえと思ったが良い事あるじゃねえか、お淑  
やかな女は降ってこなかつたけど龍を寄越してくれた神様に感謝し  
ねえとな。

「なんで私が断食行を・・・辛いのだよお。」  
「ルウちゃん精神面が弱いからね、殺すと決めたら心乱さず仕留  
めないで。それに乱れる程度の弱さではそろそろ打ち止めになる。  
剣にする魔術にする今のままでは想い人すら守れない。」  
「・・・頑張ってください。」  
「くははっ励め若人達」

こっちの目標もバレバレなんだからなあ。  
まっ良いさ、いずれ姐御を超えて最強って頂に昇ってやんぜっ！！

## 金城鉄壁

騎士の存在意義、物心ついた時からそれを考えなかった日は無いように思う。

ブウクリイエ家は一時零落したとはいえその間も国を護る為戦い続けてきたとお爺様やお父様から聞かされている、地位の高低に関わらず国を護る為に戦ってきた一族を私は誇りに思う。

だが、戦や魔獣種の討伐の無い時の一族の体たらくときたら・・・酷いものだ。職務を放り出し山へ、森へ、荒野へ、海へ、砂漠へと敵を求め出かけていく、その時の表情と叫びたらお小遣いを握り締め市場へと走っていく子供の表情と変わらないのだ。幼い時分には彼等・彼女等が英雄譚の主人公に思えたが今は残念でならない。

騎士は戦う為に生まれた職業、そして騎士となるために生まれた一族のブウクリイエ家。祖王の友として建国に貢献し国を護る為の剣盾となり戦場を駆けた初代は私達を見てなんと思うのだろう。それでこそ騎士と思うのか、逆に嘆くのか。

大陸全ての国家が友好的であれば戦争が起きず、人が過度な欲を抱かずに生きれば犯罪は起きない。ならばこれらがなければ騎士は居る必要がないのだろうか？いや、瘴気が溜まれば魔物が発生する、そして種として続く魔物や獣が居る。

大陸は広いが人の住める土地は散在しているので護る人間が少数では対応できないだろう、実際に他国では対応が追いつかず傭兵がこれに当たっていると聞く。そうなると人品が良い傭兵は騎士なのか？逆に人品の悪い騎士は・・・盗賊と変わらないな。では私達一族は・・・。

「魔力が乱れていますよ、フルール。」

千路に乱れていた思考で魔力が乱れたようだ。

「申し訳ありませんニユイ様、雑念が混じったようです。」

「また愛しいフォルスの事でも考えていたのでしょ」「誰があんな戦鬪狂!」「素直にならないと行き遅れますよ。それに呼び方が他人行儀です。」

「別に素直になるならないは関係ありませんアムールお爺様。第一兄妹で結婚などと。」

「ゲール君も嘆いていましたよ。『何度見合いをさせてもその場で相手を叩き潰して一向に結婚しようと思せん』と、そろそろ私や私の友人を安心させて欲しいものです。」

「それはゲールお爺様が連れてくる人がどれもこれも私より弱いからです!」

そう弱いのだ、剣にしる魔術にしる話にならないくらい。

「剣で以って貴女に勝てるのはゲール君やトゥランやフォルス、魔術で以って勝てるのは私とマルウルと・・・プウルやエスプリでは先ず無理でしょうね、あの子達は研究方面に向いていますから。」

「皆家族ではありませんか・・・。」

兄様に剣で負けるのはまだ納得がいく若いのだから、だがお父様は老境に差し掛かっているが勝てないのだ納得いかない、ゲールお爺様に到っては何時お迎えが来てもおかしくない歳だが勝てない、本当に人種なのだろうか？

剣だけではない、魔術を使っても負ける。と言うか魔術が効かない、下位龍のプレスなら身体強化の魔術すら使わずに生身で防ぎ切るのだ。中位龍だと身体強化魔術を使って無傷、上位龍でやつとダメージになるとか、人種じゃないな絶対別の何かだ。いくら私が魔術を使えるといってもそれは上位手前の龍種クラス、当然勝利を掴める

レベルではない。

魔術の方はアムールお爺様やお母様のは殆ど災害だ、同じ手段で挑むこと自体間違っている。剣で挑んでも届く事は無い。人外ばかりだな私の家族は……。

「その家族だけが勝てるのですから、縁故で連れてくる人が到底勝てるものではありませんよ。マルウールの時はトウランが頑張ってくれたので結婚に漕ぎ着けましたが、貴女まで『私より強い相手を』と望まれるとどうにもなりません。まだ発展途上とはいえ剣のブウクリイエ家と魔のニユイ家の良い所を継いでいる貴女です、妥協するかしてもらわないと曾孫の顔を拝めなくなってしまうです。」

「兄様が結婚して子を儲ければ良いのです。」  
「良いですか？フルウール。祖父の言葉ではなくニユイ家としての言葉で説明します。ブウクリイエ家は代々闘争に執着しますはつきり言って戦馬鹿です、若い頃は特に顕著なのですよ。ゲール君などが私が結婚を勧めたときに『結婚などしている暇は無いぞアムール、まずは戦争だ！』と言いましたね、フォルスはそんな彼によく似ていますから……分かってくれますよね？」

正直分かりたくもない。ないのだが、どうやら私にも戦馬鹿の血が濃く流れているようだ。

「悩む乙女を眺めるのはやはり良いものだね。」

「相変わらず神出鬼没ですね、丞相。お茶を用意しますので少しお待ちください。」

「茶はいらないよアムール、菓子と酒を出してくれば良いから。」

ああそれと薬湯と炒り豆も追加してくれ。」

「わかりました、エスプリが仕込んだお酒がそろそろ飲み頃のはずでしたから纏めてお持ちします。」

国家の重石ともあろう方が昼の日中からお酒とは、いや丞相ほど仕事をされている方はいない言うのはお門違いだ。

それにしてもエスプリ兄様の魔術研究は食に偏りすぎている様に思える。執念と言える程に美食を追及する姿勢は魔術師、いや本人が言うには錬金術士か。しかし、しかしだ！

「断食行を行っている私の前で食べるのは止めて頂きたいのですが。」

「悩める乙女だけでなく負け犬を眺めながら飲む酒は格別だろうね、それに断食行も終わりの時間だ、カリカリしないで欲しい。」

ああもうそんな時間だったのか、先程の追加注文は私の為か。

「今回の断食行で得るものはあったかな？ルウちゃん。」

「感覚を研ぎ澄ますには役立ちましたが逆に思考は纏まりません、やはり余裕がなければ物事に正しく向き合うのは無理がありそうです。」

「まあ及第点な答えかな。」

相変わらず閣下の採点は厳しいな。

「それは厳しくもするさ、期待しているからね。」

思っている事を読まれるのは慣れた、丞相なら何でも出来そうな気がするし。

「お待たせしました丞相。フルール、貴女はまだ楽なほうですよ、私やゲール君の時など拷問の方が優しく思えたくらいですから。トウランやフォルスも相当厳しくされていましたが私達程ではなかったですよ。」

「拷問が優しく・・・どのような事をなさったのですか？」

「今回の酒は良いな、黄金色の香りとと言えるね。合う料理は何も言わなくても既に考えているかな。」

「閣下？」

「ん・・・死なない程度に切り刻んだり魔術を打ち込んで回復魔術で元通り、これを延々と繰り返したくらいだよ。」

「疲れ果てて寝ている最中にすら襲撃されましたね、逃げ出しても魔術砲撃を受けましたから。」

「何もそこまでなさらなくても・・・。」

私だったら心が持ちそうにないな。

「あの頃は国が腐っていたし人材も悠長に育てている情勢ではなかったからね、それでもしないと立ち行かなかつただけだよ。」

「今は随分と余裕ができましたからね、生き残ることに必死で何かを楽しむ事などとてもとても。」

私達の世代は恵まれているな、何とかして恩返しをしないと。

「何、子供を生んで顔を見せてくれればいいさ。」

「考えておきます。」

「私も曾孫の顔を早く見たいですからね。」

「・・・善処します。」

「くははっ これは時間がかかりそうだねえ。」

相手が居れば私だって恋もしたいし結婚もしたい。でも認められる相手なんて同年代で居た例がないし。

「ねえアムール、この様子では当分先になりそうだよ。」

「ゲール君はめげずに勧めているみたいですが相手選びも限界でし

よう。」

「ここはやはりフォル坊に頑張ってもらうしかないか。ルウちゃんクラスだと相手がもう居ないからね。」

「それが一番早そうですね。」

好き勝手言ってくれるなこのお2人方は。

だいたい兄様のどこに認められる要素があるというのか、職務を真面目に取り組まず戦うことだけしか考えてないような人など、それに私に優しくないし、認めてもくれないし、褒めてもくれない……。

「ツンデレだねえ、好きなら好きと言えば良いのに。」

「誰が誰を好きだと言うのですか閣下!!」

こうなったら誰もが文句を言えないくらいに強くなる。  
先ずは腹ごしらえからだ。

## 一 暴十寒

「ではおさらいになります。属・種を説明します。」

黒板の文字を消しスペースを確保する。

「先ずは獣属、知性の有る無しに関わらず自然に生きる者達の総称です。龍種や魔獣種・走獣種・鳥獣種・水獣種などですね。

妖精属は各魔術属性に沿った種分になります。火妖種・水妖種・風妖種・土妖種・氷妖種・雷妖種・木妖種・光妖種・闇妖種、別の属性は使えませんがその分適正の属性は相当なものです。彼等と親交を持ったのなら学ぶことが多いでしょう。

最後に人属。並人種・森人種・山人種・海人種・獣人種。ああ獣人種はそれぞれに特徴がありますので得意な事も違います、他は好んで住む場所に合った能力になります。並人は種的に大抵のことはできますがその分器用貧乏になりやすい。」

私の名前はプウル・ニユイ。魔のニユイ家に生まれ資質にも恵まれてはいます、恵まれてはいますが戦等はどうも忌避感がありもっぱら研究や教育、生活の向上に力を注いでいます。妹にはその事で散々馬鹿にされましたね、軟弱だの腑抜けだのと・・・いけない授業に集中しないと。

生徒を前にし説明を続ける。

「もう1つ種を説明しますが魔術について少しお話します。皆さんも習ったでしょうが魔術とは世界に満ちる魔力や自らの魔力を使い力として発現させる事で陣や符も魔術の形式です、向き不向きはありますが使えない種は居ません。ですが1部例外として種毎に一切

の魔力を持たず突然変異的に生まれる事があるのです、とてもとても低確率ですけど。その方達は一切の魔術が使えないとは言え同種に劣る訳ではないのです、寧ろ同種を遙かに上回る力を持ちます。これが変異種と呼ばれています。

変異種が持つ基本能力は膂力や頑強さです、生身で城砦を粉碎し生半可な武器では傷すら負いませぬ。一切の魔力を持たないし取り込めないから魔術なら通るかと思えばそれもなく、皆無だからその身に魔力を受け付けなし、魔力を感じる事ありません。

他にも能力を持ちますが個々によりまったく違い、文献に記載されている能力を見てもどれ1つとして同じものはないのです。」

板書をしながら説明をしていく……のだがこの件は何度説明しても嫌なものです。

「教会の俗物は魔術を神から授かった力と謳います、強ち間違いないでしょうけどね。例外を除いた全ての種が魔力を用いることができるのですから。なので大抵の国や教会は変異種を異端として扱い、生まれて直ぐに殺します。理由は『国に仇をなす』から。馬鹿馬鹿しい限りです、過去の変異種が暴れた理由も考えれば分かりそうなものですが。」

生まれたときに行われる判別にはそういう訳があったのか、等と生徒たちがざわめく。

「補足しておきますがトランキリテで行われている判別は生まれた子が健康であるかどうかを調べるためです。もし変異種が生まれたのであれば陛下や丞相が両親と相談して事に当たるでしょう。」

間違った認識を植えつける訳にはいきませんかからね。

「国に仇為したとされる変異種の誰もが迫害を受けています、そんなことをされれば変異種でなくとも国に立ち向かいます。事実圧制を布いた国では民が叛乱を起こすでしょう？当然ですね日々精一杯生きていくのですから、物として扱われれば納得いかないでしょうし、不満も溜まります。民衆の叛乱ならば国が傾くなり打倒して新たに国が生まれる程度、しかし変異種が暴れたらその程度では済みません。神の代弁者を騙る教会が国々に勅を出し討伐を命じる、その結果国が傾くどころか滅びます、聖戦などと言ってはいますがやっていることはマツチポンプです。」

「では他国だと判別で変異種と分かり次第殺してしまうのですか・・・。」

感受性が強い子ですね。このまま心を曇らせずに育て欲しいものです。

「でも先生、判別で変異種が分かるのであれば国に仇為するのは不可能では？」

他の生徒がもつともな疑問をぶつけてくる。

「良い点に気付きましたね。全ての種に変異種が生まれると言いましたけど判別の時に殺されるのは教会に属する種の国や魔術偏向の種に生まれた場合です、獣属や精霊属や山人種・海人種・獣人種で生まれた場合だと長になったりします。彼の属・種は同じ種全てが家族であり例え変異種であっても大切な家族なのです、尊敬に値します。膂力や魔力の実力主義な山人種・海人種・獣人種なら変異種は神からの賜り物として扱われます、獣属は個の強さで序列が決定しますから問題になりません。なので他国に生まれたと知れた場合戦争となったり同種が迫害されたりしますね。ですが生きた魔術と

言われる精霊属が迫害をしないのは何故なのでしょうかね？彼等にとって魔術は単なる技術に過ぎなのか？それとも博愛に満ちているのか？・・・失礼話が逸れました。」

どうしても自分の研究分野だと思いが逸れてしまいますね。

「では並人種や森人種の国家に仇為したのは他種族ですか。」

「その言い方だと並人種や森人種の驕りになってしまいますよ。品位の善し悪しは置かれてきた環境に因って決まるのですから。国家に仇為したとされるほどです、ならば双方の考えを理解してからでなければなりません。」

「もうしわけありません先生、浅慮でした。」

種に強弱はあれど優劣はない、同じ種であれ強弱はあるのだから。差別意識は品位を落し心を濁す、この子達がそうなっては困る。

「種族間であれば仇為すではなく戦争です、お互いの価値観を共有できず争いになれば起こる悲しい事実。獣属であればそれは生存競争、妖精属はもとより争いません、人属だけが戦争を起こすのです。ちなみに同種で戦争を行うのは並人種だけです、そして森人種は他種族を見下します、この点だけでも並人種や森人種は他種族より劣っていると思いますよ。」

幾人かの並人種や森人種の生徒は嫌な顔をする、私とて並人種だ目を背けたい事実だが説明しないといけない。トランキリテで種は平等でなければいけないのだ。

「では仇為したとされる変異種方達について説明しましょう。過去に教区の国家や魔術至上主義の国に生まれ反逆したのは並人種が3人の森人種が2人、合計5人の変異種です。内死去したのは4人、

1人は今も存命です。5人に共通するのは備わった特種能力、『愛し合う者でなければ殺せない』や『満足するまで死ねない』や『戦場でなければ殺せない』や『自害しなければ死なない』と言った死に関するものばかり。変異種に備わる能力は概念ばかりです。今も尚生きている並人種の1人は魔術至上主義の時代に生まれたとの事、なんと2000年も前ですね。彼女・・・ああ女性なのですが、彼女は魔術の触媒にするため狙われ捕らえられていた妖精属を憂い反逆した方です。その関係でしょう、人の身であるが妖精王となっています、特種能力は反則とも言える『不滅』。もし彼女が悪意に満ちていれば世界は当の昔に滅びていたと思います。」

丞相に連れられてお会いした事があるがとても気さくな方でした、国崩しをやつてのけたとは思えないほどに。

「他の4人も迫害されたり愛するものを奪われたりされています。もしそれらがなければ国はどう発展したのか気になります。考え方も栓のないことですね。」

「では迫害を受けない国では変異種は活躍されているのですか？」  
「もちろんです、国の重責を担い活躍されています。高名は聞いたことあるでしょう？隣国ダローガの皇帝が変異種ですよ。ただ悲しい事なのですが変異種は子を儲けることができないのです。次代の皇帝は直系となりません。」

「たしか・・・ズイムリヤー皇帝と言えば元近衛団長のトゥラン様と互角と聞きいたな。」

「今の団長のフォルス様もそうだけどブウクリイエ家の方達は変異種なのかな？」

「誰も彼もが異常なほど強いからそうじゃないか？でも子供いるしなあ。」

「護衛騎士のフルール様は自分より強くなければ嫁にいかないと聞いたけど、先生は子供を生めないって言ってるしそこも気になる

かな。」

「何お前フルウル様狙ってるのか？そりゃあ幾らなんでも無理があるだろ。」

「あんた馬鹿じゃないの？大して強くもないのにフルウル様に勝とうだなんておこがましいわよっ！」

「やっぱりフォルス様よりフルウル様のお嫁さんになるのが夢よねー。フォルス様って家庭も顧みず戦いに行きそうだし。」

「『だよねー。』」

哀れですねフォルス君……。伯父としては聞かせられない台詞です。

「言っておきますがブウクリイエ家に変異種は居ませんよ、全員が普通の並人種です。」

「いやだって先生。この間フォルス様が上位龍と素手で殴り合って勝ったあげく、相手どころかその一族にも気に入られて酒盛りだったと聞きましたけど？」

「まじかそれ、本当に並人種なのか？上位龍相手じゃ武器使ったとしても傷つけれると思わないぞ。」

「その前になんで素手で戦うって話なんだが。」

「先生ー？嘘ついてないですよね？」

「全員が全員並人種です、嘘に聞こえるかもしれませんが……。それにフォルス君ならまだ可愛い方です、トランキリテ最強は丞相です。丞相なら殴り勝つではなく1撃で粉碎すると思いますよ。いえ、実際にしてましたね、あの光景は悪夢です。」

若い頃修行という名の拷問にかけられ龍種に襲われたとき……。よそう思い出したくも無い。

「拷問とは酷いねプー、お姉ちゃんの繊細な心は傷ついたよ。」

「授業中です丞相、可及的速やかに出て行ってください。」  
「先生サイテー。」「閣下ちはーっす！」「やっぱ閣下可愛い」  
「お持ち帰りしたい!!!」「うおーっ!!!閣下俺だーっ結婚してくれ!!!」「閣下だ、閣下きたこれで勝つる。」「椅子になります座ってください。」「踏んでくださいほんとまじで!」「閣下のご尊顔だこれで10年は戦える。」

この馬鹿共がっ!・・・いかん生徒に対してなんてことを、反省せねば。

「丞相、来られるのであれば授業時間外でお願いしたいのですが。」  
「未来を担う若人達を眺めにね。そうしたら良からぬ事を考えている子が居たみたいだからさ。」  
「それは失礼しました。どうやら積年の恨みが溢れ出たようです、小言なら後で聞きますので授業の邪魔を『から〜ん から〜ん』  
・・・今日の授業はここまでにします。」

丞相が来られると授業にならない、時間帯を気にして来て頂きたいものだ。

「くふふつまあ良いじゃないか、ただ学を詰め込まれる訳でなく明るく振舞え育っているのだから。子供たちを導くだけでなく君達教師も成長しないとさ。ほらっ学徒諸君、授業は終わったのだから青春を謳歌してくるんだ。」

「。。。はーいつ!!!」「。。。。」  
「元気があって良い事だ。後数年もすれば国を助けてくれるだろうね。」

そうでしょうとも、教師一丸となって大道の真ん中を歩けるようあの子達を育てているのだから。

腰抜けだ軟弱だと罵られようと研究に励み、次代を担う人材の教育に勤めてきたのだ。強さを示す必要はない、それは他の人に任せればいい。あの子達が夢を実現できるように知識や知恵・技術を教えられれば私達は満足なのだから。

「それが君の、君達の良い所だよ。昔は武勇智略だけでもなんとかなった、だが今はそれらだけでは足りない、可能性は多ければ多いほど良いのだから。マルウルではこうはいかないだろうね、あの子才はあるが教えるには向いていない、鍛えている時に痛感したよ。だからプウル、君達教師が若い子達を導ける様日々励んでほしい、それが若い子達のためでもありこれからの国のためでもあるのだから。」

認めてくれる人が居るのは有り難い。多くの人々から賞賛されるのは死んでからでも十分だ、今は1人でも理解してくれる人が居ればいい。

「懐かしいものだね。」

「何のことですか？」

こうやって諭されている事についてだろうか？

「いやいや、君達は誰か1人が諭されていると何時も皆で扉の前で待っていたなと思い出してね。ほらそんな所で待ってないで入ってきたらどうだい？久々に教えを説こうじゃないか、茶でも飲みながらね。」

何時まで経っても先生には敵わないな、日々情熱を持ち心冷まさず精進するでしょう。

私達の想いは次の世代の糧になるのだから。

一 暴十寒（後書き）

ちよつとした説明回

勢いで書いているので齟齬がそろそろ出てきそう

そして4話目で早くもタイトル変更

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4563ba/>

---

不易流行

2012年1月15日08時08分発行